

4. グローバル化の歪み

医事万華鏡

今年に入って、物騒なニュースを目にするのが多くなったような気がします。昨年を象徴する言葉は「災」でしたが、それを上回るほどの事件の多さに、次は何が起きるのかと身構えなくてはならない今日この頃です。

その具体例としてまず挙げておきたいのが、イギリスの合意なきEU離脱をめぐる一連の騒動です。遡ること19世紀には7つの海を支配するとまで言われたイギリスは、ナポレオン戦争で大陸封鎖令（ベルリン勅令）が發布されると、ヨーロッパ大陸諸国との貿易が禁止され、一時は経済的孤立に追い込まれることになりました。それから約190年後の1993年に巨大な地域統合体であるEUへの加盟を果たしたものの、2016年6月の国民投票ではEUからの離脱が可決されてしまいました。これは「地域の一員」ではなく「一つの国家」たらんという意識が突き動かし、結果と捉えられなくもありませんが、過度のグローバル化への反動としてのローカル回帰、いわばグローバル化の歪みが噴出した結果であるとも考えられます。

また、先日が多文化共生を標榜するニュージーランドでイスラム教の礼拝所が襲撃され、50人が死亡した銃乱射事

件が発生しました。容疑者の犯行声明には、「白人社会が移民に侵略されている」といった内容が綴られていたそうです。多文化共生は失敗であった」というドイツのメルケル首相の発言に表れているように、各国の移民政策の歪みが浮き彫りにされる事件は多々起きています。とすると、今後、外国人労働者の受け入れ拡大を図るわが国は、果たして同じ道を歩まないと言い切れるでしょうか。

グローバル化の波は裏を返せば、フラットで均質な世界の到来を意味します。しかしこれは移民問題に関して言えば、受け入れる側と受け入れられる側双方に、その文化や考え方を变えることを強要することになります。そこから生まれた違和感、鬱積した怒りがこのようなテロ事件に結びついていくように思うのです。

一方、医療分野では広義の慈善活動の一つとしてUHCやグローバルヘルスの達成が謳われています。しかしそうした善意を施す主体が国家であれば、主権者である国民の同意が得られなくてはなりません。日本の社会保障制度の持続可能性が危ぶまれている時代に、発展途上国のUHCの支援のために日本国民が我慢を強いられるのならば、本末転倒という他ありません。

時代は多様性を飲み込む（「グローバルイズム」）ことではなく、多様性を認める「社会へと移行しつつあるようです。であればこそ、人々には新天地で生きるより、今いる場所で問題解決を促す方が長い目で見たときに有益なのではないでしょうか。

（JMS主幹・野村元久）

